2010 年度第 1 回課題研究会記録（討論部分）

日　時：2010 年度 5 月 26 日（水）15：10～17：00
場　所：大阪電気通信大学寝屋川キャンパスエデュケーションセンター（J 号館）312 室
テーマ：第 1 部　教職課程認定大学実地視察校報告
　　第 2 部　履修カルテの作成・運用について
司　会：佐野正彦（相愛大学）・桝井かず美（園田学園女子大学）
記　録：重藤美江子（神戸女子短期大学）

＜第 1 部　教職課程認定大学実地視察校報告（摂南大学の実地視察について―深川八郎氏・関西福祉科学大学の実地視察について―八田武志氏）に関する質疑応答＞

質問：①　前年度の 3 月 10 日に実地視察の連絡があったということだが、今年度既に文部科学省から実地視察の連絡を受けている会員校あればお伺いしたい。
②　関西福祉科学大学が「中（社会）高（公民）教科に関する科目の関連図書が少ない」との指摘を受けたことに関して、教育学関連科目の図書に関してもチェックがあったのか、視察の観点などご教示いただきたい。

八田：（質問②について）本学は社会福祉学部（養護教諭・公民の免許）の教職課程履修者が少数であるため、その関連図書が充実していなかった。視察の際は、書架に配置されている関連の教科書、著書等が点検された。残念ながら、公民に関しては、1 つの棚の半分程度しか関連図書がなかった。棚二段程度が関連図書で埋まっていると問題ないと感じた。「教育原理」などの教職科目に関しても当然点検が行われ、「自分の著書がある」と喜んでおられる場面もあった。免許（教科）に特化した書籍が各 40～50 冊程度以上配置されておれば問題ないと思われる。

司会：　質問①について、3 月に文部科学省から通知がなければ、今年度の視察はないと考えられるがその解釈でよいか。また、既に通知をうけている会員校があればご報告いただきたい。

奈良大学：　今年度対象校となった。4 月当初にメールにより連絡があった。本日の報告と同様で、教職科目の開設曜日、学長の都合等を調査表により 4 月中旬に返信したところ、4 月下旬、文部科学省から後期の視察である旨の連絡があった。非常に戦々恐々と準備しており、他に視察対象校となっている会員校があれば、情報をいただきたい。

神戸親和女子大学：　4 月にメール連絡があった。4 月 23 日までにスケジュール等回答したところ、秋学期視察との通知があり、現在準備を進めている。

大阪国際大学：　他大学と同様に 4 月に連絡があった。全私教協のブログにも今年度実地

視察日が紹介されていた。本学は他の業務と重なったこともあって時間割・スケジュール等の回答がぎりぎりになった。「調査表記載のための期間をあまり設けることができない」と言われていたので作成に苦慮することを心配していたが、連休前に、文部科学省から後期実施との回答があり、調査表作成に関しては、時間的ゆとりができた。

質問：　本学は、昨年度近畿厚生局による保育士及び介護福祉士養成施設指導調査を受け、その際は、出席簿などにより 15 回の授業実施を細かくチェックされた。また「この学生は 10 回も休んでいるのに成績がでているがどうなっているのか」との指摘まで受けたが、実地視察にあっては、コマ数、出席回数、教育実習時間数等がどのように確認がされるのかその実際をお聞きしたい。

八田：　厚生労働省所管の資格と文部科学省の実地視察とでは対応が異なる。福祉や管理栄養士の調査の際は出席簿のチェックがあったが、教職課程の実地視察に関しては、このような点検はなかった。

深川：　関西福祉科学大学と同様であった。視察の時点で、授業回数については、次年度シラバスから 15 回に修正することとしていたので問題はなかった。教育実習についても、特に指摘はなかった。

（また、以下は敢えて情報提供するが・・・）本学の中・高免許課程は神戸親和女子大学との提携により小学校免許の取得を可能としているが、これは教育職員免許法に抵触するのではないかとの指摘が委員からあり、視察から 1 週間経たないうちに、文部科学省へ出向することとなった。本件については、結果として抵触しないとの回答が得られたものの、その折、視察での指摘事項について念押しされた。

質問：　摂南大学の実地視察について、同時限に複数授業が設定されている場合、全員が一緒に授業視察したのか、それとも分担して回ったのか。また。2 時限目は資料（P.3 参照）に記載されているとおりの順番（授業→情報メディアセンター→授業）で視察があったのか。

深川：　12 人揃って授業見学を行った。大学院の授業は狭い教室を使用したゼミ形式のものであったが、全員が入室しての視察であった。また、2 時限目は記載どおりの順路で行った。「情報科教育法」の授業教室と情報メディアセンター、図書館は同じ 10 号館に配置されている。「特別活動論」は外国語学部の棟となっている。

＜第 2 部　履修カルテの作成・運用について（神戸女子大学　多畑寿城氏）に関する質疑応答＞

質問：　神戸女子大学と同様のものを作ろうと取り組んだが、今年度の実地視察を意識して取り敢えず紙ベースで作成した。紙は、配付すると学生が紛失する恐れもあるので、あらためてシステム構築を再検討したい。前回の説明では、学生の成績データ

がエクセル形式で表示されるように聞いたが・・・

多畑：　完全にできていないので紹介していないが、「プロファイル」には必要項目が追加できる仕組みになっており、エクセル形式の成績データが必要であれば、入力されているデータを加工して加えていくことは可能。

質問：　例示された履修評価一覧表の内容を再度確認したい。

多畑：　表に示されている「科目分類」は免許法に定められている科目、「科目名」は自大学開設授業科目、「評価」には、資料 P.24 に示している「履修状況評価内容案」の評価が、教員が入力した得点に応じて自動的に示されるようになっている。

質問：　この履修評価一覧表に学生の自己評価を加えて示すことができるか。

多畑：　システムに入力されている「履修評価」と「学生評価」のデータを用いて、双方を一覧にした新しい表を作成することは可能。必要な情報をクリックで入力さえしておけば、そのデータを用いてニーズに応じた帳票を PDF やエクセル形式で活用することができるよう、本学情報システム管理課に依頼し作成した本学独自の仕組みである。

質問：　四天王寺大学が、神戸女子大学のシステムを参考にして開発していると聞いたが、そのあたりの話をお聞きしたい。

四天王寺大学：　3 月初旬に見学にお邪魔した。本学事務担当者がやる気になって現在作成中である。ポータルサイト導入に合わせて、これを利用できる範囲内で構築することとしている。そのため、汎用性はあまりない。成績管理は、別の仕組みにしたいと考えている。教職に関する科目は、担当教員に評価を入力してもらい、教科に関する科目は、神戸女子大学と同様に「秀・優・良・可」に対応した評価が自動的に表示されるよう考えている。

質問：①　このサイトへのアクセス権はどのように考えているのか。

②　本学の場合、教育実習までこぎつける学生が 1 年生の登録時から比べて最終的に 30～40 人減少する。このような場合、辞退者は登録を外していく必要があろうかと思われるが、この点どのように運用されるのかお伺いしたい。

多畑：①　アクセス権は教職支援センター職員に限定してスタートする。来室された先生に対しては、必要な情報のみを閲覧いただく。また、データを希望される先生には、必要な情報を紙ベースで渡し、事後は返却を義務付ける。面談結果など教員の直接入力を要する場合は、教職支援センター内において画面に入力していただく、あるいは、職員が入力を代行するとういう運用を考えている。

②　本学では辞退する学生があまりいない。現在は 3 年次で資格登録をしているが、今後は、1 年次に教職の登録をさせる必要があろう。一旦辞退の意思を示しても復活することがある。また、卒業後、再度教職の道を志すことも想定されるので、本学でのデータを他大学でも活かすことも視野に入れている。この場合、他大学へどこまでの情報を提供するかは今後の検討課題であるが、少なくとも、履修カ

ルテのデータは本学における教職の履修履歴として残しておくほうが良いのではないかと考えている。いずれにしても、ご指摘いただいた点は有難く、今後の検討課題となろう。

質問：①　完成時期はいつか。

②　阪神教協へこのシステムを提供していただける可能性は？

多畑：①　前期成績処理の頃までには、教員の入力部分を整える。今後の実地視察では、「履修カルテ」も確認するとのことだが、本学は平成18年度に視察を受けているので、しばらくは猶予があろう。完成形というものがあるのかどうかわからないが、「教職実践演習」が開講されるまでにはより良いものをつくっていきたい。

②　本学の情報システム管理部次長には、他大学から問い合わせがあれば対応していただくよう依頼はしている。提供できるかどうかは一存では答えられない。

質問：　神戸女子大学のこのシステムをベースにして阪神教協が一元管理し、より進化したものを作っていく、同じものは別個に作らないということを提案したいがどうか？当然お金は阪神教協が支払うが・・・

質問：　先進的な取り組みを情報提供いただき感謝する。また、カルテを学生の自己評価も含めて形式化・明示化していく作業は教職実践演習の指導において重要であると考える。しかしながら、教職課程の科目の学びの履歴（評価結果）のみが学生の教師としての力量の評価に直結するのではなく、履修カルテでは表すことのできないその他の教科教育、ボランティア等の活動をも経験することにより学生は力を伸ばしていく。このような学生の発展過程が明らかにされ、これをどう履修カルテと結びつけるのか、そしていかにこれをシンプルに示すのかということがコンセプトとなろう。4年間の成長の過程で身に着けた力量・能力が教師に求められる専門性の開発にどう結び付いていくのかという基本的な視点を押さえないまま、煩瑣な作業がクリックひとつで解消されるということを理由に、「システムの阪神教協での一元管理」との性急な意見には、違和感を覚える。

多畑：　ご指摘のとおり、このシステムは科目と数字を並べて示しているのみである。これに先生方の指導の過程、教科のみでは評価できない事項も取り入れたものにしていきたいと考えている。今のご意見は反映させていきたい。

司会：　本学でも同様な仕組みは考えており、「科目名」と「評価内容」に間に「評価点」を加え、教員が自由記述できるような空白部分も設けることを検討している。数字やこのような評価で測れないものについては指導にあたる先生方が学生を観ていくことが必要であるし、学生数が多いと評価欄の書き込みや個別の指導は難しくなると思うが、先ほどの意見を踏まえた「履修履歴」の活用が大切なのではないか。

以上